

日本脳炎

日本脳炎は昭和30年代までは年間数百人が死亡する病気でしたが、同42年から積極的なワクチン接種が実施されて以降はめったに見かけることがなくなりました。近年の患者報告数は年間10人未満となっています。しかし平成17年に日本脳炎ワクチン接種の積極的勧奨の差し控え勧告がなされてから接種者が激減し、小児での患者発生が懸念されています。

日本脳炎ウイルスはヒトからヒトへは感染しません。感染したブタを吸血してウイルスを保有した蚊がヒトを刺すことにより感染が成立します。感染しても多くは無症状ですが、100～1,000人に1人が日本脳炎を発症し、高熱の後に意識障害や痙攣^{けいれん}、筋強直、麻痺^{まひ}などの神経障害が出現します。特別な治療がなく、20～40パーセントが死亡、生存者の45～70パーセントに後遺症を残します。そのため、予防接種による予防が非常に重要です。

日本脳炎ワクチンは、第1期として生後6か月以上90か月未満の間に初回2回と1年後に追加1回の接種（本市では標準年齢3歳～4歳で初回2回、約1年後に追加1回の接種を勧めています）、第2期として9歳以上13歳未満の間に1回の接種をします。従来のワクチンはマウスの脳を精製して製造されていたため、脳組織成分の混入による副反応が疑われ、平成17年から一時的に積極的勧奨が差し控えられました。同21年からは乾燥培養細胞を用いた新たな製法となり、3歳児については積極的勧奨が再開されました。第2期接種については、同22年8月からは積極的勧奨ではないものの接種が可能となりました。第1期の接種が受けられなかった人については、現在のところ、9歳以上13歳未満のお子さんに特例として第1期の残りの回数を受けられる措置があります。

日本脳炎ワクチンについては、分かりにくい点があるかもしれません。対象年齢で接種が済んでいない人は、ぜひ保健福祉センター健康づくり推進課までお問い合わせください。

（このコラムは市立病院 病院総務課 電話（260）0111が担当しています。）